せとる　くおーたりー
C. E. T. L. Quarterly
教育・学習活動支援センター広報　No.3　発行日　17. Jul. 2001

羽吹SUA学長からのメッセージ

創価教育の創始者である牧口先生と戸田先生の師弟が「創価教育学体系」を世に問うてから70年。その創価教育の実現の一切を継承された池田先生が、日本に創価大学を設立されてから30年。本年5月3日、アメリカ創価大学（SUA）オレンジ郡キャンパスが無事開学いたしました。創価大学の皆様からの様々な応援に改めて感謝申し上げます。

SUAは、地球に責任を持ち、人間に責任を持つ、21世紀のリーダーたる「全体人間」を育成する全寮制の教養大学（リベラル・アーツ・カレッジ）です。1学年の定員が100人、4学年で400人のキャンパスになります。一期生に関しては、世界中から優秀な志願者が集まり、結果的に20カ国から120名の入学が決定いたしました。

4年後には学生と教員の比率は9対1になりますが、2001年の開学時では5対1、すなわち学生5人に教員1人の割合です。ほとんどの授業が10人から15人の規模で行なわれる徹底した少人数教育で、ひとり一人の学生の可能性を伸ばす教育をしてまいります。入学時にノートパソコンを全員に支給し、コンピュータをフルに活用した、時代に対応した教育をすすめます。

すべての授業はアメリカの大学ですから当然英語で行なわれますが、外国語教育にも力を入れ、学生は中国語、日本語、スペイン語のうちどれかひとつを学びます。3年次には、語学をさらに磨き、異文化理解を深めるために、一学期間、海外留学が全員に義務付けられています。

さて、SUAでは少人数教育の実効を上げ、世界トップクラスの大学院にも十分に進学できる学問を身につけられるように、教員の教授技能向上にも力を入れております。授業は9月から始まりますが、既にいくつかの教員研修プログラムをスタートさせております。日本の創価大学でもFD活動の中心として教育･学習活動支援センター（CETL: Center for Excellence in Teaching & Learning）が始動していることを伺い、姉妹校の学長として、また、創価大学を母校と誇る者として、大変に嬉しく、心強く感じております。

創立者は折りあるごとに「21世紀は教育の世紀である」と強調されておりますが、教職に身をおくものとして、それはまさに教師の教育力が問われる時代であると思います。CETLの大発展を期待せずにはおられません。

SUAはまだまだ始まったばかりです。世界的な大学教育競争の時代の中で、SUAは創価大学発展の歴史に学び、創価大学と共に勝利の実証を挙げてまいります。

本年度第１回目の授業見学会を開催

６月19日火曜日３限目の政治社会学（山崎純一教授担当）の授業が、本年度第１回目の授業見学会として公開されました。参観した教員は４名と少なかったのが残念ですが、参観者からは大変好評でした。この授業は社会学科の３・４年生を対象にする専門科目です。出席者は50名程度の中規模クラスです。当日はフランクフルト学派やフーコーの政治権力に関する考え方の解説が主な内容でした。昼食後の一番眠い時間帯に、なかなか難しい中身の話だったと思うのですが、机に突っ伏して寝ている学生は２～３名でした。

講義主体の授業でしたが、途中に数分間、ユダヤ人の強制収容所に関するビデオが使われていました。深刻なインパクトのある映像資料の活用も有効だったのでしょうが、やはり、90分間学生を聴き入らせている山崎先生の話し方（間のとり方、語調、余談など）は大いに参考になりました。また、授業開始時に前回の授業に関する簡単なクイズ（択一式で４問）を行い、それを成績評価に反映させる方法は、遅刻する学生を制限し、スムーズに授業を開始する良策でしょう。

教務課によると本学で行われている授業の６割程度が50名以内のクラス規模だそうです。また、100名以内のクラス規模の授業が全体の８割を超えているそうですから、50～60名の学生を相手に充実した講義ができる技能があれば、大抵の科目はこなせるわけです。むろん、200名、300名といった大規模授業を充実させるには別の技術が必要かもしれません。色々な先生方の様々な授業を見学することで、自らの講義方法にいささかでも活かせる工夫が見えてくるのではないでしょうか。(教育学部　関田　一彦)

●山崎先生の感想●

この講義は、冒頭に前回の講義内容の小テストを行なうこと、数回に1度は15分位のビデオを、見所を説明し、メモを取らせながら見せることを心がけています。大変緊張しましたが、後で自分のビデオを見ましたら、30分で寝てしまいました。教員生活20年、自己反省の貴重な機会を与えて頂き、深く感謝いたします。

私の授業改善法

「『雑談』の効用」

社会学科
桑　山　敬　己

私の授業は「雑談」が多い。そんなことを言うと、一部の先生には怒られそうだが、それなりの意図と意味がある。

私の「雑談」には二種類ある。一つは日本を中心とする毎日の出来事に関する話である。なぜ文化人類学の授業で時事問題を扱うかと言えば、この学問が研究する異文化とは自文化の鏡だからだ。つまり、教科書に書かれていることを、自分の日常生活に結びつけて考えない限り、他者に関する知識は自己との接点を持たず、他者理解はおろか自己理解さえ覚束ないからだ。

もう一つの「雑談」は、私自身の人生に関する話である。私はアメリカに11年住み、あちらに骨を埋めるつもりで永住権を取ったが、さまざまな理由で帰国した。尊大に聞こえようが、自己についての語りは、異文化についての語りでもあると認識している。しかし、そうした人類学者らしい物言い以上に、実は大切なことがある。それは、時には過度な自己撞着とも思われる私の話から、学生が学問に一生をかけた人間の生きざまに触れ、何かを感じて考えて欲しいということである。

学生によると、私の授業は好きと嫌いに評価が二分されるらしい。決して居直りではないが、それで良いのではないか。少なくとも、若い心に何も訴えるものがない中年より魅力的だろう。

私は高校生のとき、人生について深く考えすぎて、毎日が暗く辛かった。でも今は違う。楽しくて仕方ないと言うほど能天気ではないが、私には世界的な研究者になるという夢がある。大学の教壇に立つ者が夢を持っていなくて、何の教育であろう。これを吹聴ではなく、究極の「雑談」として理解していただければ幸いである。

「双方向授業の試み」

英文学科
木　下　　薫

顧みて改善すべき点は多々あるが，現在私が特に留意していることのひとつが双方向の授業である。学生とどうコミュニケーションを取るか。正直言って多人数になればなる程、困難だというのが実感である。改善法と呼ぶには余りにも基本的で，またすでに多くの先生方が実践しておられることであろうが、自らを見直す意味でも振返っておきたいと思う。

（1）授業をより円滑に進めるための雰囲気を作ること、いわゆる「アイスブレーカー」を試みている。巧まざるユーモアや斬新な切り口には程遠いが、いきなり講義や演習に入ることは極力避け、何か共通の話題で受講のための構えのようなものが出来るようにと努めることにして

いる。相手を不快にさせるような話題でない限り、たとえその日の講義内容の導入にならなかった場合でも一定の効果は期待できるように思われる。

（2）科目の性格にもよるが、講義の中で（積極的な答えが返って来なくとも）出来る限り多く問いかけるよう努めている。

（3）学期の途中でも必要に応じて、メモ用紙を配り、授業の進め方や理解度等について自由に意見を記してもらい、必要ならば軌道修正や再度の説明を行なう。

（4）特に担任のクラスについては、希望により面談の時間を設け、相談に乗るようにしている。

（5）在籍留学の学生等に対しては、e-メールでレポート課題その他の質疑応答に応じる。

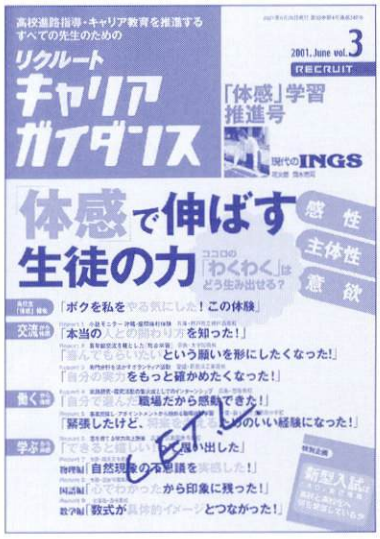
まだまだ不十分ではあるが、心と心のキャッチボールを実践するためには、たとえひょろひょろ球であっても根気強く投げ続けることが大切だろうと考えている。今回また、講義支援システム「ジャンザバー」のプレゼンテーションがあると聞き、是非見学させて頂きたく思っている。

CETLの活動の模様が『キャリアガイダンス』誌に！

リクルートが発行している『キャリアガイダンス』（2001年6月号）に、当教育・学習活動支援センターの活動内容が3ページにわたって掲載された。

同誌は、「『教育・学習活動支援センター』による学習支援の基礎講座が成功しているケース」として本学を取り上げ、「『レポートの書き方』『数学の学習法』等、学生から寄せられている相談事の上位を講座の形で具現化。新入生がつまずきやすい学習上の問題点を、教授陣が一体となって力強くサポートしている」と評価している。

さらに、同誌では当センターの利用状況や訪れた学生が記入する「学習相談シート」、「レポート講習会」での感想コメントも掲載している。



編集後記

●原稿が遅れ気味で、夏休み前の発刊が危ぶまれましたが、なんとか完成することができました。

●次号では、先日、ご協力いただきました「レポートに関するアンケート」結果を発表したいと思います。 (N)

C. E. T. L. Quarterly No. 3

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel：0426（91）9782 内線 2148

E-mail：cetl@s.soka.ac.jp